

教養研究センター基盤研究講演会 no.8

「激動の流れを生きて」

—ウクライナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える—

日時：2023年6月9日(金) 16:30～18:30

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階 大会議室

第2次世界大戦によって、全ての人々が「もうこれで『戦争』と呼ばれるものは起こるまい、いや、起こしてはならない」と固く決心しました。戦争が余りにも悲惨で、惨たらしく、このままでは確実に人類は滅ぶと考えたからです。しかし、その爪痕も癒えないうちに、朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガン戦争、湾岸戦争…と惨禍は繰り返されてきました。

船戸良隆牧師は、特にベトナム戦争下での実践的な救済活動を通して、キリスト者が、貧困、戦火、飢餓とどのように向き合うかという問題を深く考えてこられた方です。

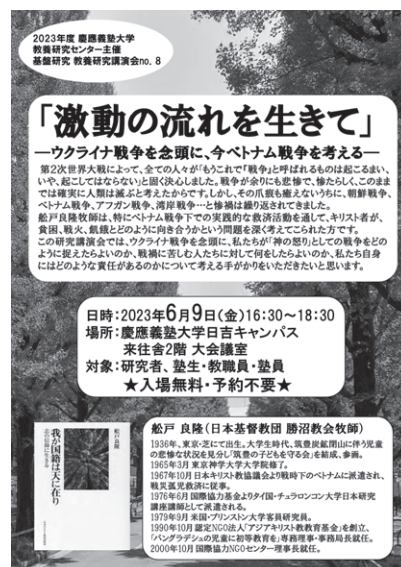
この研究講演会では、ウクライナ戦争を念頭に、私たちが「神の怒り」としての戦争をどのように捉えたらよいのか、戦禍に苦しむ人たちに對して何をしたらよいのか、私たち自身にはどのような責任があるのかについて考える手がかりをいただきたいと思います。

講師：船戸 良隆

日本基督教団 勝沼教会牧師

司会：小菅 隼人

慶應義塾大学理工学部教授・教養研究センター所員



講師略歴

船戸 良隆（日本基督教団 勝沼教会牧師）

1936年、東京・芝にて出生。

大学生時代、筑豊炭鉱閉山に伴う児童の悲惨な状況を見分し「筑豊の子どもを守る会」を結成、参画。

1965年 3月：東京神学大学大学院修了。

1967年 10月：日本キリスト教協議会より戦時下のベトナムに派遣され、戦災孤児救済に従事。

1976年 6月：国際協力基金よりタイ国・チュラロンコン大学日本研究講座講師として派遣される。

1979年 9月：米国・プリンストン大学客員研究員。

1990年 10月：認定NGO法人「アジアキリスト教教育基金」を創立、

「バングラデシュの児童に初等教育を」専務理事・事務局長就任。

2000年 10月：国際協力NGOセンター理事長就任。

著書

『我が国籍は天に在り』（日本キリスト教団出版局）

「激動の流れを生きて」

—ウクライナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える—

日本基督教団 勝沼教会牧師 船戸 良隆

小菅（司会） 皆様、お集まりいただきありがとうございます。

本日の講師は船戸^{ふな と よしたか}良隆先生です。日本基督教団勝沼教会の牧師です。私自身がクリスチャンで、日本基督教団勝沼教会の教会員です。ですから、船戸先生は、私の牧者ということになります。

船戸先生は1936年、東京・芝にてお生まれになりました。

大学生時代、筑豊炭鉱閉山に伴う児童の悲惨な状況を見分し「筑豊の子どもを守る会」を結成し、参画されました。

1965年3月に東京神学大学大学院を修了され、1967年の10月、日本キリスト教協議会より戦時下のベトナムに派遣され、戦災孤児救済に従事されました。

今の若い学生、大学院生の皆さんは、多分ベトナム戦争というのをリアルタイムにはご存じないと思います。私は60過ぎておりますが、私どもにとっては戦争といえばベトナム戦争といいますか、リアルタイムでよく知っている、アジアが舞台になった悲惨な戦争です。そこに先生は直接赴かれて、戦災孤児の救済に従事されました。

1976年6月には、国際協力基金よりタイ・チュラロンコン大学の日本研究講座講師として派遣されました。

1979年9月には、アメリカのプリンストン大学客員研究員となられました。

1990年10月、NGO法人「アジアキリスト教教育基金」を創立され、「バングラデシュの児童に初等教育を」の専務理事・事務局長に就任されました。

2000年10月に、国際協力NGOセンター理事長に就任されました。

昨年、春学期に小友聡先生にこの研究講演会で講演していただきました。小友先生は旧約聖書学の第一人者であります。

また、昨年秋は近藤勝彦先生に講演をお願いいたしました。近藤先生は組織神学の大家であります。

本日の船戸先生は、キリスト教において実践的な活動にずっと従事されてきました。その意味では、前々回の小友先生、前回の近藤勝彦先生とはまた違ったアプローチで、私たちが宗教に対してどのように関わっていくかということをお話くださると思います。

本日のタイトルは「『激動の流れを生きて』—ウクライ

ナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える—」というタイトルです。

先生どうぞ、お願いいたします。

船戸 ただいまご紹介いただきました勝沼教会の船戸と申します。

講演に先立ちまして、皆様に1つお断りしておきたいことがあります。それは、本日の講演がベトナム戦争についての講演ではないということであります。

私は今回の講演のこともありまして、最近2つのドキュメンタリーフィルムを見ました。1つは、5月29日に放映されましたNHKの『映像の世紀 ベトナム戦争 マクナマラの誤謬』というドキュメンタリーであり、もう1つは、Amazonで『フォッグ・オブ・ウォー マクナマラ元米国防長官の告白』です。いずれもよくできておりますので、もし皆さんがベトナム戦争そのものを知りたいということであれば、このようなものを御覧いただければと思います。

私はサイゴンにいましたときに、日本の出版社からたくさんの方がサイゴンに送り込まれておりました。そこでライターと称する人たちがみんな本を書いて、日本でもすぐたくさんの方がベトナム戦争について書かれたということを知っております。ですから、そういうものが参考になると思います。

私が本日の講演で申し上げたいことは、ベトナム戦争とは何かということではなく、1960年代に生きた一人の若者が、ベトナム戦争の時代をどう生きようとしたのか。その生きざまを通して、今、私たちがどう生きなければならないかということを考えていただきたいということが本日の講演の目的であります。

レジュメをお配りしてあるので、早速それに基づいて話をしたいと思います。1番のベトナム戦争とは何であったか。あの時代にベトナムで戦争が起こるということは、アメリカをはじめ西欧諸国の言わば「ドミノ理論」、ドミノというのは将棋倒しです。ダーツと将棋の駒が倒れていくような、「ドミノ理論」。もしベトナムが共産化されたら、東南アジアは全て共産化する。そうしたら世界のパワーバランスが崩れる。イギリスのある学者が「戦争というもの

は人々の恐怖心から起こる」ということを言っておりましてけれども、その「ドミノ理論」に基づいてベトナム戦争が起こったということは確かなことだと思います。

まず初めに戦争の歴史を振り返ってみますと、1964年8月にトンキン湾事件というのが起こります。ベトナム戦争がいつ始まったかということについては諸説あり、確たる定説というものはありません。大体そのトンキン湾事件というのは、北ベトナムのトンキン湾というところにアメリカの軍艦がおりまして、そこに魚雷が発射されて、攻撃されたものです。これは結局、現在ではそうではなかったということがはっきりしておりますが、そのようなことが報じられて、北ベトナムに対する攻撃、戦争が起こったわけです。

翌年の1965年の2月から本格的な北爆、北ベトナムを飛行機で爆撃するということが起こりました。そして、ベトナム戦争が南北にわたって始まったわけであります。

1975年、サイゴンの陥落。ちょうどそのとき、私はそこにはいませんで、日本に帰ってきていました。サイゴンのアメリカ大使館が襲われたりしまして、いよいよ米軍は撤退し、北ベトナムの正規軍が最後に入っていくということで終結を迎えたわけです。

私自身どういう形でベトナム戦争に関わるようになったかを説明いたします。

1960年代を私たちは「安保世代」と言いますが、60年に安全保障条約、アメリカと日本との安全保障について改定がなされるということで、東京というか、日本全体はちょっと大げさかもしれませんが、安保改定反対というデモが起こったわけです。

私たちも、当時大学生でしたけれども、安保改定反対ということで、言わば「提灯デモ」というのがありました。みんな提灯に灯を入れて、その提灯を持ちながら、「ベトナム戦争反対」と言って練り歩いたわけです。そういう形で「ベトナム戦争反対」という機運が非常に盛り上がったわけですが、私もほとんど毎晩のようにそのデモに参加しておりました。

そのデモに参加した後、みんなどうするかというと、喫茶店などに入って、おいしいコーヒーを飲んでケーキを食べながら、ベトナム戦争についていろいろと論じ合うというのが、若者の一般的な在り方でありました。

私はその提灯デモの後、喫茶店に行って友人とベトナム戦争反対ということについていろいろ論ずると、次第に「果たしてこれでいいのだろうか」という気持ちが起こってまいりました。一方で、戦争において人が死んでいる。

ベトナム戦争について反対ではあるけれども、提灯を持ってデモをして、その後、喫茶店でおいしいコーヒーを飲む、それでいいのだろうかという思いがしていました。これは極めて若者的な発想だと思います。

そうこうしているうちに、キリスト教会のEACC、東南アジアキリスト教協議会といまして、東南アジアにある教会が集まって協議会をつくっているのですが、その協議会でサイゴンに「アジアキリスト教奉仕団」という団体をつくり、ベトナム難民、孤児、そういう人たちを救済しようという運動が起こりました。日本の教会にもぜひその運動に参加してくださいという要請が参りました。

日本基督教団、これは私が今、所属している教団ですが、キリスト教協議会という、もっと大きなキリスト教会に働きかけがあり、ベトナムに行き、難民救済のような仕事に携わる人を募集したわけです。

ところが、募集をかけても誰一人その募集に応え、応募する人はいませんでした。なぜいなかったかといいますと、その当時、朝日新聞の夕刊に、本多勝一という記者がベトナム戦争についての大変悲惨な状況をレポートしていたわけなのです。もちろん彼はベトナム・サイゴンに行ったのでしょう。みんなそれを読んでおりますから、ベトナムに行ったら即戦争に巻き込まれて、運が悪ければ死ぬということにもなるのではないか。そういうふうに思っていました。ベトナム戦争に関わるという人は誰一人としていませんでした。

そういう中で、日本のキリスト教会から誰一人もいないというのは、非常に具合が悪いというか、恥ずかしいとい



うこともありまして、日本キリスト教協議会の総幹事が、学生時代、筑豊炭田という炭鉱の中に入って、仕事をしたり、孤児たちの世話をしたというような話に目をつけて、私に「船戸君、君だったらベトナムに行っても大丈夫だから行ってくれ」と頼まれたのです。筑豊とベトナムはもちろん全然関係がないと思うのですが、そういうこともあって、私は「では、行きましょうか」という形になったわけです。

その当時、日本基督教団の総会議長、トップに鈴木正久先生という方がおりまして、挨拶に参りました。鈴木先生に「このたび教団から派遣されて、私はベトナムに行くことになりました」と挨拶に行ったわけです。そうしたら鈴木先生が「それはよかった」と言うわけです。「実は自分も、誰か日本の若者がベトナムに行って働いてくれることを望んでいた」と言うのです。

それはなぜかという、鈴木正久先生は太平洋戦争において徴兵で戦争に引っ張り出されたわけですが、結核を患ってしまっていて、徴兵検査に合格しなかった。外されたのです。そして自分の同僚は皆、実際に戦争に行き亡くなっているというのです。それが鈴木先生のトラウマのようなものになりました。自分は生きて日本に今いるけれども、自分の同僚は、その当時「外地」と言いました東南アジアに行き死んでいる。そのことが大変申し訳ないと思ったわけです。

鈴木正久先生はその後、日本のキリスト教会が戦時中、戦勝祈禱会というようなことをして大変な罪を犯したということで、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」という声明を1967年3月26日に出した方ですが、その先生が、今ベトナムにおいては多くの方々の方が亡くなっている。

当時、日本の経済は非常に低迷していたわけです。朝鮮戦争で朝鮮戦争特需というのがあり、日本の経済が非常に右肩上がりになってきた。それにも増してベトナム戦争では、アメリカが日本で物資を調達し日本の経済はぐっと上がったのです。一方においては人が死んでいるにもかかわらず、日本では経済が復興して、みんながそれで喜んでいて、一体そういうことでいいのだろうか。特に宗教家として、そういうことが許されるのだろうか。そのように鈴木先生は考えていました。ですから、日本の若者がベトナム戦争に行きベトナムのために働いてほしいということを、鈴木先生は考えていたのです。そしてそのとき、鈴木先生は私にこの新約聖書のある箇所を示してくださいました。それはヨハネによる福音書の12章の14節にある言葉

です。そこにこういうイエスの言葉があります。「はっきり言うておく。一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ」。こういう言葉がありまして、鈴木先生は「この言葉に従って君もベトナムに行きベトナムの人のために死んでください」と言われたのです。今そのことを話すとみんなゲラゲラ笑うわけですが、しかし、その当時、その言葉を受けた私は、これは本当にベトナムに行ったら死ぬのではないかなと思いつつ、ベトナムに参りました。実際にサイゴンに行ってみると、すぐ死ぬなんて、そんなことはなかったわけですが、この鈴木正久先生はそういう思いを持って、私をベトナムに送り出したわけでありました。

サイゴンに着きまして最初にやったことは語学研修です。ベトナム語を徹底して学ぶということでありまして、1日8時間、6か月間、とにかくベトナム語を徹底して学ばせられました。そして6か月の研修期間が終わって、それでは「君はこのサイゴンで何をするか」ということになりました。私は常々気になっていた戦災孤児の世話をしたいと申し出ました。彼らは田舎で戦災を受け、サイゴンの町に出て来て、夜はごろごろ道端に寝て、朝になると起きて、靴箱を持って、アメリカ兵の靴を磨いて幾ばくかのお金をもらって生活していました。その姿は、私が敗戦後、ちょうど東京の上野の地下道で見た子どもたちの姿とオーバーラップしていたのです。もちろん皆さんはそういうことはご存じないと思いますが、敗戦後、上野の地下道には、戦災孤児がたくさん居り、非常に悲惨な状況でした。

ベトナム戦争において、米軍が「解放戦線」(ベトコン)、 「ベトコン」という言葉はアメリカがつけたあだ名で、正式の名前は「Mặt trận Giải phóng Dân tộc Việt Nam Nam Việt Nam (南ベトナム民族解放戦線)」という人たちであり、南ベトナムでゴ・ディン・ジエム政権及びアメリカに反対する人たちが武装蜂起したのです。そのベトコンをやっつけるという名目で、地方で無差別爆撃をしたのです。そして、子供たちはお父さんが死ぬ、お母さんが亡くなる。そうすると子どもたちはどうするか。ベトナムは大家族主義ですから、大体、親戚のうちに引き取られていくのです。ところが親戚のうちにも大変な大家族で、よそから入ってきた子どもは、一旦は引き受けられますけれども、なかなかうまくいかない。そうすると、その子どもたちは、地方からサイゴンに出てくる長距離バスの屋根の上に乗ったり、いろいろなことをして地方からサイゴンに出て来て生活するようになります。生活するといっても実際に知人があるわけでもないですから、道端に寝ている。すると先輩たち(前

に出てきた子どもたち)が「お前どこから出てきた。そうか、それじゃ俺が靴箱を貸してやるから、お前も靴磨きしろ」と言って、子どもたちは靴磨きをするようになるのです。

私はそういう子どもたちの姿を見ていたものですから、サイゴンでその靴磨きの子どもたちを集めて、食事を与え、できれば職業訓練をさせたい、そういうことに従事したいとリーダーの方に申し出たのです。

日本では「ショロン」と言いましたが、「ショロン」ではなくて「Chợ Lớn (チョルン)」と言いますが、「チョルン」の「チョ」というのは「市場」という意味で、「ルン」というのは「大きい」という意味。「チョルン」というサイゴンの隣の町がありまして、そこは商業都市、町でありますけれども、そこで1軒のガレージを借りまして、そこで子どもたちと一緒に生活をし、ご飯を食べさせて、学校に行かせるということをしました。

ところが、小学校に子どもを連れて行って校長先生に会って、「子どもたちをもう一度学校へ行かせてください。」とお願いしても、どこの小学校も受け入れてくれないのです。戦災孤児なんか受け入れられないというわけです。仕方がないので、今度は職業訓練だと自転車屋とか自動車屋に行ってお願いをしました。もちろん給料などはなし。ただ、ご飯を食べさせて欲しいとお願いしたのですが、ご飯を食べさせるのは大変だから、君のところでご飯を出すというのだったら、下働きのようなものをさせてあげる。そういう活動をしながら子どもたちと一緒に生活をしていました。

子どもたちと一緒に生活して、子どもたちは私を「お兄さん、お兄さん」と呼ぶのです。ある時、「お兄さん、一緒に靴磨きに行こうよ」「そうか、じゃあ一緒に行こう」と言って、私も靴箱を買って、アメリカ兵の靴を磨きに行きました。靴磨きというのは簡単なようですが大変なのです。

私が行ったのは1967年ですが、1968年の2月にテト攻勢というのがありました。テトというのはベトナムのお正月のようなもので、大きなお祭りをやるわけです。そのときに解放戦線がサイゴンを攻撃するという事件が起こりました。私はチョロンに子どもたちと一緒におりましたが、朝方、外でバンバンという音がするのです。テトでは爆竹をみんなバンバン鳴らしますから、私はてっきりそれは爆竹の音だと思っていました。ところが、爆竹ではなくて、実際に戦争で打ち合いをしていたのでした。朝起きてみたら割合に平穏なものですから、私はチョロンからサイゴンの事務所まで行くことができたのですが、そのうちに戒厳

令が出され、一切外出は禁止ということになりました。

私はそこで1つ大変なことを見ました。それは、そのテト攻勢の後、実際に道路を歩いてみますと、そこに解放戦線の兵士がみんな撃たれて死んでいるのです。ところが、生き残った人たちは、サイゴンの市民にかくまわれるというか、「どうか自分を隠してください」と市民のところに行って、解放戦線の人が市民にかくまわれる。ところが、5~6日ぐらいたった頃から、サイゴンの人々は情勢を見て、これは解放戦線が勝つのか、それとも政府軍が勝つのか、もし解放戦線のほうが有利であれば、そういう人をおかくまっていたということが自分にとってはプラスになる。しかし、政府軍が勝つということになったら、解放戦線の人をおかくまっていた場合は大変なことになります。ですから、今までおかくまっていた人をみんな外へ追い出すという事になりました。それで政府軍がトラックにどんどん、そういう人たちを載せ、連れて行くのです。

これは嘘か本当かよく分かりませんが、解放戦線の人たちは「お前たちがサイゴンに入ったら、好きな家を占領しろ。そうしたら、その家を君たちの住まいとしてあげるから」と言われて、サイゴンに入ってきたと言われていました。戦争というのはそういうものだということをその時につくづく感じさせられました。

そういう事件があって、私は一旦日本に帰ってきました。というのは、日本でキリスト教会を中心にして、「ベトナムに医療品を送る運動」というのが始まったのです。ところが、医療品を集めて送るというわけですが、北ベトナムはハノイに送ればいい、南ベトナムはサイゴンの病院に送ればいいのですが、解放戦線はどこへ送ったらいいか分からんという状態でした。そこで、「解放戦線はどこに送ったらいいか探せ」と言われたのです。私が所属している団体の中に地方で診療しておりました女医さんがいて、その女医さんのところに行って相談しました。サイゴンから2時間ぐらい車でいきますとカイバイというところがありまして、そこは昼間は政府軍の支配地、夜は解放戦線の支配地という競合地区でありまして、双方に税金を払わなければならないという大変なところなのです。そこにいた女医さんをお願いして、解放戦線の人に実際に会い、解放戦線ではどこに医療品を送ったらいいかということを相談しました。解放戦線の方は「自分が密書を書いてあげるから、それを持ってプノンペンに行きなさい。プノンペンに解放戦線の事務所があるから、そこで相談してみなさい」と言われました。日本で言ったら「こより」のような薄い紙にダーッと書いて、それをこよりにして、これを

持って解放戦線のところへ行けと言われたのです。プノンペンの解放戦線にそれを持って行き、「どこに送ったらよいか」を聞き、「カンボジアのこういうところに届けてくれ」と言われ、届けることができたわけです。

その当時、ちょっとした農村に行けば、昼と夜で支配する人たちが違うということが普通になっておりました。これはだいたい後の話になりますけれども、サイゴンが陥落するという事態が起きた時に、日本大使館に現地雇用の日本人職員の方がおられました。日本の大使館というのは本当にでたらめだと思うのはキャリアの外交官というのは、決して現地語を勉強しないのです。例えばベトナム大使館の人たちはベトナム語を勉強しません。なぜ勉強しないかというと、ベトナム語を勉強して、ベトナム語が分かるようになったら、そこに張りつけられる。そうしたら、自分はそれ以上出世できない。だからベトナム語を勉強しないというのです。ですから、現地の状況は、現地で雇ったベトナム語が分かる日本人の現地情報提供者が情報を集めてきたものを、日本大使館はベトナムの情報として見るわけです。その様な人の一人が、いざ解放になった時に、奥さんが2〜3日どこかなくなってしまったのです。どこへ行ったのかと心配しておりましたところ、2〜3日たったら、高級車に乗って戻って来たのです。どういうことかという、その奥さんは解放戦線の幹部だったのです。

それから、共同通信社でもそうでした。共同通信社の通訳、大体日本の特派員というのは現地語を勉強しないので通訳を使っていましたが、共同通信の通訳もまた解放戦線の幹部で、共同通信を通して日本に送られるベトナムの状況というのは、全部解放戦線に筒抜けであったなわけです。

私はそのときにつくづくと考えさせられたことがあります。日本人はベトナム戦争において、解放軍、解放戦線一辺倒でしたが、戦争というのはそんな単純なものではない。とにかく一筋縄ではいかないということです。私は、後にバンコクに来てから日本人会の会報誌に書いたのですが、でも、「トンボの目思考」が重要ではないか。すなわち、単眼では駄目なのです。これは日本人は、ほぼ単一族ですから、何かというと大体ひとつの方向にガーッと進んでいく傾向があります。だけど東南アジアというのは、そんなものではないのです。この様なこともあるし、こうも考えられる、こういうふうにも考えるという複眼的思考でないと理解できないことが多くあるのです。私はサイゴン大学の学生運動というのをちょっと支援しておりましたけれども、こういうことがありました。学生運動のリー

ダーが殺されました。すると、当局の発表は「ベトコンがやった」と言うのです。ところが、実際はそうではなく、政府側がそのリーダーを殺して、「これはベトコンがやった」と発表するのです。そして、学生運動を弾圧する。ですから、何が本当で何が本当でないかということは、全く分からないというのが実情でありました。

そういう中で私は生活しておりました、とにかくアメリカ人というのは、南ベトナムの政府寄りであって、アメリカ軍をよく言う人はいませんでした。本当にアメリカというのは貧乏くじというか、人はいいいけれども全然何も分かっていないという評価でした。その当時よく言われたのは、「南ベトナム政府軍とアメリカ軍の間には、鉄条網が引かれている」と言うのです。だから、アメリカ軍も南ベトナム政府軍を信頼していないし、南ベトナム軍もアメリカ軍を信用していないのです。そういうことで戦争なんかできるわけがないという状況でした。

しかし、そうした中でひとりのアメリカ人、ドン・ルースという人がいました。その名前が本名かどうか分かりませんが、わたしたちは彼を「ルース、ルース」と言っておりました。そのルースが、あのサイゴンで反戦運動をしたのです。彼はいろいろな資料を集めて、それをしかるべきところに送ったりしておりました。彼の家は幾度も政府軍によって、家捜し^{うち}というか、夜、政府軍に家探しされておりました。わたしは、ルースに頼まれて、いろいろな資料を預かったことがあります。私の部屋も二度ほど、真夜中に政府軍の兵士が来て、ドアをダンダンダンダンと叩くのです。今すぐ行って「開けるから」と言わないと、機関銃でダダダダッとやって鍵を壊して、なだれ込んでくるのです。わたしは何かがあったらと思って、5階に住んでいましたけれども、いつでもロープで下に降りられるようにしておりました。そういう中でドン・ルースは実際に反戦運動をしていました。

そして、そのドン・ルースの一番の功績と言え、彼が米国の下院議員をアメリカから呼んで、ベトナムの監獄を視察するという事をしたことです。アメリカ議会がベトナムの監獄の環境をよくするためにといってお金を出していたのです。ドン・ルースはその議員を招いて「トラの檻」と呼ばれていた監獄に下院議員を案内したのです。監獄を見て回っているうちに、係りの者が、「はい、もうこの先には何もありません。」と言うのですが、ルースはその壁をトントントンと叩くと、向こうからもトントントンと返ってきたのです。「この向こうには何かあるじゃないか。開けろ」と言って、強制的にそこを開けて中に入ったとこ

ろが地下牢、地下に「トラの檻」と呼ばれる牢獄があったのです。それでルースはそれをバチバチと写真に撮って、アメリカに送り、それが『LIFE』に載ったり、『ニューヨーク・タイムズ』に載ったりして、もう大変な騒ぎとなり、アメリカにおける反戦運動に決定的な刺激を与えたのです。

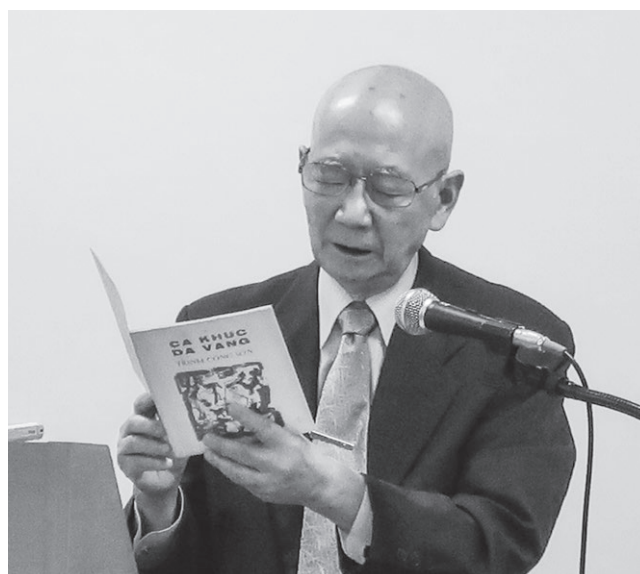
ルースに「日本でも、ぜひ君がやってくれ」と言われて、私の先生である隅谷先生にそれを送って、日本では岩波の『世界』に出してもらいました。

そういうことがきっかけとなって、アメリカで反戦デモが非常に大きくなり、アメリカのベトナム撤退につながるわけです。

わたしは、今のウクライナの戦争を見まして、ベトナム戦争とオーバーラップして考えるのですけれども、先日、NHKの番組で見たのは、マクナマラ元米国国防長官が、国交が回復された後、ベトナムを訪ねた時の話です。マクナマラ長官が「生涯を通して、ぜひ、北ベトナムのボー・グエン・ザップ将軍に尋ねたいことがある」と言って将軍にこう質問をします。「北ベトナムがあればほど大きな損害を得ていたにもかかわらず、なぜ和平交渉に応じなかったのですか」とすると、ザップ将軍はこう答えました。「自分たちはこの戦争を100年だって続けていこうと思っていました。と言うのは自由と独立ほど貴重なものはないからです」そう答えたのです。まさにそれこそベトナムの魂だと思いました。

私的なことで大変恐縮ですが、私はこういう経験があります。サイゴン大学で講義をしていたら、非常に優秀な女性がいたのです。いつでも試験をやったら1番、トップでした。その女性が、私がちょっと日本へ帰ってきたときに、お茶の水女子大にストレートで合格したのです。彼女はお茶大で勉強していたので、ベトナム語を忘れるといけなからわたしにベトナム語を教えてくれないかと頼みました。その代わり、「あなたに、わたしが、日本語を教える、日本語とベトナム語を交互に教え合うようなことをしようじゃないか」と提案しました。それは彼女も大喜びでした。1年ぐらい経ったころでしたか、わたしはサイゴン大学でも彼女をよく知っており、将来ベトナムで働きたいと思っていましたので、彼女にこう言ったのです。「自分は将来ベトナムに行って仕事をしたいと思っており、何かベトナムの人たちのためになる仕事をしたいと思っているので、私と結婚してくれないか」と。

そうしましたところ、彼女はしばらく考えて、こう答えたのです。「船戸先生、それは自分にとってはとてもうれ



しいことです。でも、ベトナムの愛国的な女性は、小さいときからこういうふうに教育されています。「外国人と結婚するようなことは絶対にしてはならない」。そして彼女はこう言ったのです。「もしベトナムの女性が外国人と結婚したら、今頃ベトナムという国はこの地球上に存在していなかったでしょう。ベトナムの愛国的な女性は絶対に外国人と結婚してはいけないと自分は教育されているから、先生には大変申し訳ないけれども、先生と結婚することはできません」こう断ったのです。

プロポーズされて、このように断るという民族があるのでしょうか。私は本当に驚きました。

私が今ここに持ってきましたのは「Ca khúc da vàng」という、「黄色い皮膚を持った人の歌曲」という意味で、チン・コム・ショーンという人が、当時サイゴンで出した本ですけれども、この人は歌で反戦運動をしていたのではないかと思います。カイン・リーという女性がこの歌を歌っていて、この歌集の最後に載っている「Gia Tài Của Mẹ」という曲があります。「Gia Tài」というのは、「遺産」です。「Mẹ」というのは「母親」。だから「祖国の遺産」というのです。その出だしにこう書かれています。「Một ngàn nămđôhộgiặc Tàu」。「中国に自分たちは1,000年間奴隷として支配されてきた」。中国と1,000年間自分たちは戦ってきたのです。「Một trăm nămđôhộgiặc Tây」、「Một trăm」というのは、100年間、自分たちはフランスと戦ってきた。そして、今、内戦です。だからベトナム民族というのは、1,000年間も中国と戦ってきたから、絶対にベトナム人は中国人を信用していないのです。

なぜ、和平交渉をしなかったと言いますと、たかが10年か20年のベトナム戦争で、手を上げて和平交渉するな

んてことはベトナム民族には考えられないのです。

わたしはウクライナのゼレンスキー大統領にぜひこのことを伝えたいと思います、こんなことは百も承知だと思いますけれども、「自由と独立ほど貴重なものはない」。この言葉は、ベトナム民族の言わば血となり肉となっているのです。わたしは、ベトナム愛国者の彼女からプロポーズを断られたことから、ベトナム戦争はこういうものであったかということをつくづくと考えさせられたわけです。

皆さん、今ここにいらっしゃる若い方が、こういう戦時下であって、ウクライナの戦争の中、私たちが何をしなければならないか。また、ウクライナ戦争だけではなくて、アジアにおいて、アフリカにおいて、こういう世界の中で私たちが何をしなければならないかということを真剣に考えていただきたい。それが私の本日の願いであります。以上でございます。(拍手)

小菅(司会) それでは早速、質疑応答に入りたいと思います。

皆さんいろいろ考えるところがあると思います。私が最初に口火を切る意味で、2つほど先生にご意見を伺いたいと存じます。

1つは、戦争のような大災害において、キリスト教は一体何ができるかということなのです。そもそもベトナム戦争の発端になったゴ・ディン・ジエム首相はカトリック教徒だと思います。それに反対したのは仏教徒。それが1つの火種になったと思います。仏教、キリスト教ということに限らず、もしかしたら宗教というのは、こういうときに何の役にも立たないかもしれないと思うのです。そのことについて、先生がどう思われるかということが1点。

もう1点は、先生が最後に強調された、「自由と独立というのは非常に重要である」という考え方と、そして前段のほうでおっしゃいました、戦争というのは決してしてはいけないのだという考え方、この2つというのは、もしかしたらしばしば衝突するかもしれない。自由や独立を置いても、戦争は避けるべきだと考える人もいましょうし、自由・独立を守るためなら戦争も止む無しと考える人もいます。多分、今のウクライナはそういう考え方なのでしょう。この2つの考え方が衝突するときに、我々はどう考えた方がいいのかということをご教授いただければと思います。よろしく願いいたします。

船戸 いずれも非常に難しい問題ですね。私が今ここに、これは中公新書ですけれども、『キリスト教と戦争』という

本を持ってまいりました。これはいかにキリスト教会が戦争に加担して、そして世界における戦争が行われてきたかということが書いてある本です。確かに今、小菅先生がおっしゃったように、ベトナムにおいては仏教の方が戦争に反対して焼身自殺、ガソリンを自分にかぶって、火をつけて、そして生きている僧侶が亡くなるということがありました。

一方においては、アメリカをキリスト教国と言って良いのかどうかということは問題ですけれども、キリスト教が支配しているアメリカがこの戦争をしている。ゴ・ディン・ジエムにしてもキリスト教徒です。そういうことが実際に起こるわけです。ドン・ルースも、彼はクエーカー教徒でありサイゴンで反戦運動をしていた。

今、反戦運動をするというのは、そんなにびんと来ないかもしれませんが、サイゴンで反戦運動をするということは、大変なことなのです。というのは、例えば政府軍がドン・ルースを後ろからズドンとやって殺したとします。それをどういうふうに発表するかといたら、「これはベトコンがやった」と言って、それでもう終わりです。何の詮索もなされない。そういう中であって、一^{いち}アメリカ人がそういう反戦運動をしたということは、私はすばらしいことではないだろうか考えるわけです。

ですからキリスト教が、ある場合には戦争に反対し、ある場合には戦争の火種となった、十字軍はその典型ですけれども、そういう場合もあるでしょう。そういう歴史をたどってきたわけです。

では、キリスト教というのは一体何なのか。宗教というのは全然、戦争を阻止することに対して力はないのではないかな。そういうふうに言う人もいるかもしれませんが、実際にそうかもしれません。

しかし、わたしは、ほんの微力ながらも、自分が^{いち}キリスト教徒として何かしなければいけないのではないかという思いに駆られてサイゴンに行ったのです。そして子どもたちと一緒に生活をしました。

キリスト教と戦争ということについて、それをどう考えるかというのは大変大きな問題でありまして、さっき紹介した本などでも、結局どうであるという結論みたいなものは出せないと思うのです。

確かにさっき申しましたように、日本でもあの第二次大戦のときには、キリスト教会が戦勝祈祷会、この戦争は自分たちの国が勝つようにとって、祈祷会をしました。それは事実として残っているわけです。

ただ一方、市民権運動をしたマルチン・ルーサー・キングは自分の身を挺して、ベトナム戦争に反対したのです。

それが、彼が暗殺されるということの1つの原因になりました。キリスト教は、どうあるべきか、キリスト教とはどうなのかということは、なかなか言えないと思います。ただ、その中で「あなたはどうか」と言われた場合に、わたしは、ベトナム戦争に対して反対であり、ベトナム戦争反戦のために、実際に反戦運動という具体的なことをしたわけではありませんけれども、私としてコミットしたのです。

それから2番目の、「自由と独立と戦争」という問題ですけれども、これも極めて難しい問題です。しかし、わたしがベトナムにおりまして考えたことは、ベトナム民族は1,000年間も中国によって支配されていた。わたしはベトナムで、また、東南アジアのいろいろなところにいて、植民地主義というものが、どれほどひどいものであるかということを実際にベトナムの人からも聞きましたし、キリスト教の団体、アジアキリスト教奉仕団の中であって、フィリピンの人と一緒に難民救済の仕事をしておりました時、フィリピンの人からも話を聞かされました。フィリピンにおいて日本軍がどんなにひどいことをしたか、自分のお父さん、おじいさんから聞いているというのです。ある村に行き、「日本軍に反対しているのがいるだろう。そういう者を出せ」と言われ、「自分たちは知らない」と言うと、赤ん坊を連れてきて、その赤ん坊をバーッと宙に放り投げて、拳銃でバサッと突き刺して赤ん坊を殺した。「あなたはそういう日本人の血を引いているんじゃないか」とフィリピンの看護師さんから言われたのです。そのときわたしは「いや、わたしはそういうことはしない」なんて、そんなばかなことは答えになっていないと思いました。「申し訳ない」。その一言だけです。だから、その植民地支配というものがどれほどひどいことかということを経験したベトナムにおいても、フィリピンにおいても知らされました。

わたしはタイにもおりました。タイと日本はアジアで唯一植民地支配を受けなかった。だから全然違います。タイで私は生活しましたが、タイ人とベトナム人は全然違います。そういう中でわたしは考えたのです。とにかく民族の独立というものが、どれほど貴重なものであるかということを経験した日本人には理解できないと思います。

日本人は、もちろん敗戦後、アメリカ兵が入ってきたけれども、それはベトナムでなされたこととかフィリピンでなされたことは全然質が違います。わたしは「では、どちらをお前は取るか」と言われたら、やっぱり私は戦っても独立は勝ち取りたい。こういうふうに思います。以上です。

小菅（司会） ありがとうございます。

発言者 A 商学部1年生のAと申します。

2つ質問があって、日本におられたときのベトナム戦争の認識と、実際現地に行ってベトナム戦争を見たときの認識の差というのは、どれほどのものだったのかということ。あと1つは、今ウクライナ戦争をやっている、いろいろな現地の映像が送られてくると思うのですが、もし船戸先生が今、若者だったとしたら、そういう映像を見てもウクライナの現地に行く勇気があるかどうかということを知りたいです。

船戸 初めの質問ですけれども、わたしはベトナムに行き初めて、マスコミというか報道機関というか、そういうもののいい加減さ、でたらめさを知りました。

例えば朝日新聞なんかでもそうですけれども、みんな特派員を送るわけです。そして日本にいて、ベトナム戦争というのはどうなっているかとか、どうであるかということは、そういう特派員が記事を書いて、送ったものが記事として載るわけです。ところが、日本の新聞社にはデスクがいるのです。そのトップの考えによって記事が載るかどうかが決まるのです。現地の記者は俺が送ったあの記事は結局ボツにされた」と言っていました。だから結局、ベトナム戦争というのはどういうものであるかとか、どういうところでどういうことが起こっているかということは、極端に言えばデスクがどう判断するかということによって、紙面に出るかどうかということなのです。そしてわたしはベトナム語が、今は全く忘れてしまいましたが、その当時は「お前はチョロンの中国人か」と言われたくらい堪能でしたので、日本から送られている特派員が、共同通信とも、朝日の記者と親しかったものですから、前線に取材に行きたいという時に「船戸さん、一緒に行つてよ」と言って、私を連れて前線でいろいろ取材するわけです。それを書いて日本に送るわけです。例えば、フランスとかイギリスの特派員というのは、非常に優れていると思いました。特にフランスは、記者そのものがベトナム語を理解できるわけです。だからベトナム語で実際にいろいろ取材するのです。ところが日本の記者でベトナム語が分かる人は誰一人としていないのです。わたしもキリスト教の雑誌にずっと連載していたのですが、若干の疑問を感じたのです。それは何かというと、その頃、日本の出版社は、猫もしゃくしとも言っていていくらいにライターと呼ばれる人をサイゴンに送り込み、一部屋に閉じ込めて、ベトナムについてとに

かく何でもいいから書いてくれと言われ、書くのです。若干の資料を渡して、その人たちが書き、それが本になって日本で売られるわけです。

わたしはそれに対して、ものすごく憤慨したのです。一方においては人が死んでいるという現実、もう一方日本では、それを商売にしてもうけているというわけです。そんなことが許されているのか。では、お前はどうかのだ。お前だってベトナム戦争の悲惨なことを文章に書いて、ベトナム戦争とは何かということを知ってもらおうとしている。それでいいのかと非常に考えさせられました。今のウクライナ戦争もそうですけれど、日本人が日本人的な思维構造をもってウクライナ戦争を理解できるか。これは大きな問題です。日本人は日本人的な価値観、これは当然そうですけど、日本人的な価値観をもって戦争を見るわけです。そういうレンズをもって、いろいろな事実を見るわけです。これは歴史観の問題にも関わるとは思いますけれども、どういう価値観をもって、それを事実とするか。これは大変大きな問題です。事実というのは無限にあるわけです。その中から自分に何が大切であるかということはどういうふうに抽出するかということは、自分の価値観によるわけでしょう。例えば「今日、今まであなたは何をしましたか」と聞かれたときに、「何と何と何をしました」と抽出する。いろいろなことをしているわけですから、その中から何を抽出するかということは、自分が大切だと思う、価値観によっているわけです。それと全く同じです。ベトナムに行ってベトナム戦争を見た。ウクライナに行ってウクライナ戦争を見た。そのときに、日本人的な価値観をもってそれをどういうふうに見ているかということがあるでしょう。わたしは実際にサイゴンでベトナム人を理解し、ベトナム人の目を持って戦争を見ることができるのかといったら、絶対できない。ですから、その様な限界があるという事を知らされるということが、重要なことではないかと思うのです。

皆さん若い人も、ぜひ勧めたいことは、とにかくアジアに行って、そして何年間かその土地で生活してみる。その国の人がどういう価値観を持っているかということを経験してみる。それができなかつたら、この慶應大学でもインドからの人もいますし、ベトナムからの人も、いろいろな留学生がいるでしょうから、そういう留学生、ひとりでもいいですから、その人と本当に親しくなって、そしてお互いにお互いの欠点をさらけ出すことができるような友達をつくるということ。それが非常に重要だと思います。

日本人が日本人的な価値観をもってアジアの問題を見るという時代は、もう終わったと思うのです。皆さんの時代はそういうことを乗り越えて、アジアの人たちとどういふふうに関に生きていくかということを考えなければならない。そういう時代だと思います。

それからウクライナのことですけれども、わたしはウクライナについても非常に興味がありますが、ただ、現在お前はウクライナに行くかといったら86歳になりますから、今行ったら全然役に立たないだろうと思います。今、行けるとは思いませんけれど、若い人たちがこういう問題をどう考えるか。自分たちの生き方としてこの問題をどう捉えるかということは、非常に重要なことではないかと思います。

小菅（司会）

ほかにいかがでしょうか。

発言者B お話ありがとうございました。理工学部の教員でBと申します。

わたしが最初に質問しようとしていたことに近い質問を小菅先生のほうからなされたので、それでほとんど納得したのですが、もう少し深めて聞きたいなと思います。それは民族の独立とか自由の問題なのですが、先生のおっしゃったお話では、すごく実体験に基づいていて、単なる知的なアプローチではなく、実際に体験なさったことに基づいておっしゃられているのですごく説得力があったので、そこに抽象的な質問をするのもちょっと違うのかなとは思ったのですが、それでもやはり聞きたいなと思いました。民族の自立とか自由とか独立というのは本当に深刻な問題で、それが実際の生活に直接関わってくることがあるわけです。だから、たとえ仮に戦って守らなければならないのであれば、それはやはり守るべきだというお話も本当によく分かりました。

その上で、それは本当にある意味正論だと思ったのですが、キリスト教徒としてどうなのかなと気になりました。私はキリスト教徒ではないのですが、キリスト教としての価値観と、その民族の価値観みたいなものは、どこかで矛盾するような気もしたので。

というのは、もしかしたらキリスト教的な発想だと、もっと個人というものを重視したり、あるいは個人と神とのつながりというものを考えるのかなと思いました。民族の価値というものに先生は実際に触れられる中で、キリスト教徒としてのご自分の価値観みたいなものとの関係とい

うのはどうなっていたのだろうというのがちょっと気になりまして、その点をお願いします。

船戸 これも本当に難しい問題だと思います。個と全体と言いましたが、これは、それこそ古代ギリシャの哲学からずっと今に至っている問題だと思います。

キリスト教会というのも、教会という1つの組織体として、私はキリスト教会の牧師で、新約聖書を一緒にみんなで勉強していきましょうということをやっていますけれども、イエスの時代にはユダヤ教というすごい団体がありまして、それに対してイエスはものすごい攻撃をしているわけです。だから全体の悪といいますが、そういうものは確かにあるわけで、人間がこういう組織の中に入れられたというか、そのときの言わば「悪」という問題は、これは大変なものだと思います。

小菅先生と私は『「悪」の研究』という本を買って、そして読書会をしようと言っているのですが、まだ実現していませんが、一体「悪」とは何であるかということは、これは1つ大きな課題です。そのときに「組織」というものが、どう関係しているか。例えばナチスにしても、これは非常に難しい問題だと思います。

今ロシアで、ロシア正教がプーチン政権を絶対支持しています。ロシア正教というのはロシア民族と一体化して、今のウクライナ戦争も当然正当なものだと言っております。そういうことを考えたら本当に、何といひかな……。

発言者 B 質問を少し言い換えますと、先生個人としてどう考えるのが重要かみたいなことも強調されていたと思うのですが、その中で日本人としてではなく、キリスト教徒として、ご自分で何か意識される点がありますか。今ご説明なさった民族の自由とか尊厳とか、そういうものに関する考え方の中で、自分はキリスト教徒だからこそこう考えるのだみたいな部分というのはあるのでしょうか。

それとも圧倒的な実体験の中で、自分の宗教的な信条というものはあまり関係なく、人間として民族の自立、自由というものが大切だと考えるのか、もしくはキリスト教的な考え、キリスト教徒としての考えというものが何かあるのかという、その辺りについてちょっと知りたいのです。

船戸 私は「キリスト教徒として」という、それは大前提であって、それを外すということとはできないと思いますね。

ただ、民族の独立とは何かということを本当に考えさせられたのは、やはりベトナムに行ってからです。ベトナム

の人と接し、ベトナム戦争の中でベトナム人がどう考え、どういうふうに行動しようとしているかということです。先ほど申し上げましたが、マクナマラがボー・グエン・ザップに質問したというのは、私はいかにアメリカ人的だなと思いました。そう言ったら悪いと思うし、アメリカ人だって、十把一絡げにすることはできませんけれども、アジア人のことは、なかなか理解できないのではないかと思います。わたしもそういう意味で言えば、日本人としてベトナムにいて、一人のキリスト教徒としてではありますけれども、なかなか難しいのではないかと思います。

ちょっと話がそれるかもしれませんが、わたしは「アメリカ人がアジア人を理解するということは難しいな」と思ったひとつのことがあります。わたしがプリンストンにいましたとき、プリンストンの日本研究講座の主任教授、マリウス・ジャンセン先生という方が居られました。日本研究で、日本政府から勲章をもらったぐらい日本研究をすごくよくやっている人なのですが、一度わたしにこう言ったことがあるのです。「船戸くん、君、プリンストンで教師にならないか。」と言われたのです。わたしは、ジャンセン先生に即座にこう答えました。「わたしはアジアに使命を感じていますので、そのつもりは全くありません。」。一昔前と言えば「コーリング」とか「ベルーフ」とかという、言わば「召命」です。「自分は神様によって自分の使命を与えられていますので、プリンストンの教師になるつもりは全くありません」と言ったのです。そうしたら、ジャンセン先生はこう言いました。「ストレンジ」「日本人でプリンストンの教師にならないかと言われて、それを拒絶したのは君が初めてだ」

わたしはそのことを聞いて、この人はアジア人の気持ちというのを本当に分かっていない、アジア人がどういう価値観を持っているか、日本研究の第一人者だと言われてる人が全然分かっていないなと思いました。「じゃあお前はベトナム人のことを本当に分かっているか」と言われたら、「いや、どうですかね」と答えざるを得ないし、キリスト教徒として、それはわたしにとっては大前提ではありますが、そういう問題をどう考えるかということはいまだに課題です。そういうことを言って、逃れるようなことになって申し訳ないのですけど。

発言者 B 今「使命」というようなことをおっしゃったので、それでわたしは少し理解できたような気がしたのですが、こういった活動も含めて、ある意味キリスト教

徒としての自分の使命と考えられているという理解でも大丈夫でしょうか。

船戸 そうですね。だからわたしは、マルチン・ルーサー・キングに注目したいのです。彼は暗殺される原因ともなったベトナム戦争に対して大反対をしているのです。彼は人種差別反対をやったのですが、その事とベトナム戦争反対ということは黒人として、気脈が通ずるところがあったのではないかなと思っています。

発言者 B ありがとうございます。

小菅（司会） どなたかほかにいかがでしょうか。

発言者 C 経済学部1年のCと申します。

お話を聞いて、ベトナム戦争の反対をしている後に喫茶店に行ってコーヒーを飲んでいたという話を聞いて、私自身の今の状況とすごく重なった感じがします。高校生の時、ウクライナ戦争について友人同士でネットやテレビで拾った情報を議論したりしていたのですが、それは結構自己満足だったなと。今、思いかえして、表層的な理解だけをしていた、というか、分かってほしいポーズだけ、いい子ちゃんのふりをしていただけで本当に理解はしていなかったなという感じがしました。

そこで質問なのですが、本当に理解したければ現地に行って何年か過ごすか、その地域の人と、（留学生と）お話しする、腹を割って話すのが大事とおっしゃられていたと思うのですが、そういう機会が得られなかった場合に、例えば現地の人を書いた本とか、そういうのを読むとかでも、間接的だから理解するのは難しいのでしょうか。

船戸 わたしは、オール・オア・ナッシングという思考は取らないつもりなのです。だから、自分は本当に理解できないから結局何もできないのだと、そういうふうになってしまうよりは、少しでもあなたに今できることをすることが、わたしは大切だと思うのです。

それが、本物にはとてもなれないよ、ということも、それは自分自身でも思うだろうし、人からもそういうふうに言われるかもしれないけれども、何もしないということよりは、とにかく何かをする。だからそれは本を読んでいただくのだから、それでもいいと思います。

今、自分が置かれた状況の中で、自分が何をすべきか、ということを自分自身で考えて、それを実際に行うという

ことが、わたしは非常に大切なのではないかと思います。「知行合一」、「知る」ということと「行う」ということは一緒なのだという、日本の思想の中にもそういう考え方がありますが、キリスト教の考え方の中にも「実際に何かものを知る」ということは行うことだという考えがあります。

ひとつわたしに非常に影響を与えた本があります。それは『キリストに倣いて』という書物ですが、学部1年生ぐらいのときに読んで、非常な感銘を受けました。

例えば、こういうことが書いてあるのです。「もし自分が謙遜を欠き、そのため聖なる三位一体の神の御心に背いたとするならば、三位一体について深い知識を持ち、またそれを論じたとしても、何の益するところがある」。三位一体というのは、父、子、聖霊というキリスト教の知識ですけれども、そういう知識を持ったとしても、それが自分の生活とか信仰とかになっていなければ、そういう知識を持ってもそれは何もならないのではないかと。

「たといわたしが、聖書の全部とあらゆる哲学的教理とをそらんじたとしても、神と、その恵みとを愛する心がなかったならば、何の益があるか」。「愛する」ということは、要するに行動に移すということです。だから、自分がどんな知識を持っていたとしても、それが実際の行動というものと結びついていなければ、その知識は一体何なのであろうかということを考えさせられました。学んだ知識をどう生かすかということも、また大切だということを知っていただきたいと考えているのです。

発言者 C ありがとうございます。

小菅（司会） ほかにいかがでしょうか。

発言者 D 総合政策学部2年のDと申します。

質問というかコメント的な感じなのですが、自分自身、今年の春にベトナムに行ったのです。研究室でベトナム戦争の枯葉剤で障害を持った人が多い地域があって、そこにフィールドワークという形で先生に同行させていただいたのです。

自分の行く意味というのはもともと何も考えずに行って、そこに入っているいろいろなことを感じるわけです。ずっと日本に住んでいて初めて気づくこととか、平たく言えばそうなのですが、自分自身ひとつ心に残っている質問があって、たまたまそのフィールドワークにハノイから来たベトナム人の高校生もいたのです。彼に「何しに

来たの」と僕は言われて、自分はそれにすぐに答えることができなくて。今も答えていないのですが、自分自身、それからそのフィールドワークに行った意味とこの夏もう一回行かせてもらうことになっています。こういうふうに聞かれたことは教授にも言ってないのですけど。

そのひとつとしては、さっきも言っていたと思うのですが、その場所を知ることですね。でもそれは学問的なものではないと思うし、さっきプリンス頓で断ったという、あのアジア人の感情ですね。あれは別に学問的なものでもなくて、そこに住んで初めて気づくこととか、そういう部分のはざまにあるものというのは、自分自身まだ分からない部分もあるし、一生分からないのだろうなという思いですけど、ベトナムに行ったということを、キリスト教徒としての自分の認知とか、個人的なこととしていろいろ紡がれているのを聞いて、自分もそういうふうに見えるような何かがあればいいなと思いました。

すみません、質問でも何でもないのでけれど。

船戸 ベトナムに実際に行かれて、そして枯葉剤のことを知る。わたしはそういう体験をするということが、非常に重要だと思うのです。実はわたしは、今は引退しましたが、アジアカリクリスト教教育基金という団体をつくって、学生たちを連れてバングラデシュにスタディツアーをしていたのです。高校生もいましたし、もちろん大学生もいた。大学の1年生とか2年生、若い魂の人たちは、バングラデシュに行き、自分の人生が変わるという様な影響を受けます。今は大分バングラデシュも変わってきましたからないでしょうが、わたしが最初にバングラデシュに行ったときは、子どもたちが勉強をする、文字を覚えるのにノート、紙がなかったですから、「かまどのすず」を溶いて濃くして、木の葉っぱに書くのです。あれは仏教徒なんかがそういうふうにして写経をした、そのように子どもたちがやっていました。わたしは、それを写真に撮って持ってきました。そういう、現実に若い人たちが、若い魂が触れると、わたしが連れていった学生の何人もの人が、その後アジア研究に入って、大学院へ行ったり、留学して勉強し、現在、大学の教師になっている人が何人もいます。本当に若いときにそういう現実**だ**いぶにぶつかるとい**う**か、あなたが枯葉剤を見たという事実が、わたしは非常に重要だと思うのです。そしてそれがあなたに何をさせるのか、何を与えるのか。実際に何かしなくても、スタディツアーで学生をバ

ングラデシュに連れていって、その一人一人の生き方に何らかの影響を与えている。その人たちはその事を通して、自分の生き方に何らかの影響を与えられているのです。もちろん全員がアジアに何か奉仕をしたいということなんてあり得ないことですが、しかし、そのような事が必要だ**と**思うのです。

特にアジアに行くなり、アジアのことを学ぶなりすること、何といっても日本人はやっぱりアジア人ですから、アジアの人たちとこれからいろいろなことを一緒に考えていかなければならないのですから、アジアの人たちがどういうことを考え、どう**い**う価値観を持っているか、どうい**う**ふう**に**生きようとしているか、そういうことについて実際に体験する**とい**うことが、非常に貴重なことだ**と**思っています。ですから、あなたがそのような経験をな**さ**った**とい**うことは、貴重なことだ**な**と思います。

発言者D さっきの葉っぱの話、僕も貧困の地域に行つて、あまりにも物質的なものがない中で、小さな勉強机と少ないプリント類とかを見て、自分はこういうふう**に**私立大学に入つて勉強させてもらっている。それに対して思うこともあったのですが、日本の日常生活に戻ると、それを忘れてしまう。当然かもしれないのですが、今年の夏もあそこに行くというきっかけをもらっているという意味では、確かに自分自身また新しいことを学んで、それを新しい価値観にできる**とい**う意味では、大きなこと**な**のかな**と**思いました。ありがとうございます。

小菅 (司会) ありがとうございます。

お願いします。

発言者E 政策・メディア研究科修士1年生のEと申します。私は中国出身で、私のおじいさんが今80歳を超えたのですが、20歳の頃にベトナム戦争でベトナムに行つて、北ベトナムに協力したこともありまして、帰国した後、回想記を書こうと**考**えたことがありまして、でも、当時はやめました。理由としては戦争が**す**ごく残酷であり、その体験を通じてもう一度振り返るのはやめになりました。

そう考えると、体験したこともなくて、戦争を直接話すことは不十分だ**と**思ひまして、でも、その考えは先ほどおっしゃった、コーヒーやケーキを食べながら戦争を話しているその若者の話につながります。

これは質問なので**す**けれども、体験したこともなくて、

どの場面でどの立場に立って、その戦争とか戦争反対という話を展開するのか、当時の日本の若者にとって、その話をちょっとぜひ伺いたいです。よろしくお願いします。

船戸 適当な答えになっているかどうか分かりませんが、体験というものと経験というものでは、体験しただけということであれば、それは何かただ体験しただけという、そこに終わってしまうと思うのです。それを自分の経験として昇華させるというか、そういうことが非常に重要ではないかと思うのです。

だから何かこういうことをした、例えば学生をバングラデシュに連れていったとしても、ある人は「バングラデシュに行って、こういう貧しさがあった」ということで、それで終わってしまうという人もいるかもしれない。しかしある人は、そういう現実におち当たることによって、体験することによって、それを自分の経験として「自分はアジアのために働きたい」と思う人もいる。

こういう話があります。東京女子大の1年生です。ある夏、バングラデシュに行ったのです。そうしたら真夜中に一人の女子学生がわたしの部屋をコンコンと訪ねてきて、「先生、実は自分は昼間こういう体験をしました」と言って話し出したのです。寺子屋学校の教室に行ったら小さな女の子が「ぜひ自分の家^{うち}に来てくれ」と言うのだそうです。もちろんベンガル語ですから言葉は何も分からなかったけれども、その子どもに連れられてその子^{うち}の家に行ったというのです。そうしたら、木のベッドと、茶碗とお鍋が転がっているだけ。そこに家族5~6人が生活している。彼女にとっては、それはものすごいショックだったわけです。彼女はわたしにこう言いました。「先生はいつも『神は愛だ』と言っているけれども、もし神が愛であるならば、どうしてこういう現実があるのですか。なぜ、このような貧困を神が許しているのですか」。そう言って、彼女は涙をぼろぼろ、ぼろぼろこぼしながら、わたしを問い詰めたのです。

わたしは、答えることができませんでした。何も言えなかったのです。なぜ、このような現実が起こっているのか、それでもなおかつ「神は愛だ」なんて、いうことが出来るのか、それは私には分かりません。

ただひとつだけ言えることがあると思う。それは、こういう貧しさがこの世界にあるということを神は「善し」としたまわない。これは確かだと思う。だから、そのことをなくす、そんなことはできないと思うのだけれども、そのようなことに自分が目覚めて、それをなくすために何らか

の仕事をする、自分で行動するということが重要であるということとは言えるのではないかと思う。彼女は今、実際にアジアの美術を日本人に紹介する仕事をしています。今はそういう人がいないかもしれないけれど、わたしが最初にバングラデシュに行った頃は、道路に竹で囲いのようなものを作り、そこにぼろ布をかぶせて、そこで一家が生活していたのです。わたしにとっても、ものすごいショックでした。道端に竹で家を造り、そこにぼろを掛けて一家が生活しているというのは、日本では到底考えられません。そういう体験を「この人たちはこういう生活をしているのだ」というただ体験をしただけでは、「そこに貧しい人がいるな」という考えにしかすぎないでしょう。

しかし、それを自分の経験として昇華し、どうするかというところにまで考えていくことが重要ではないかなと思います。

それからさっきからキリスト教ということが出て来ましたが、わたしは、現在、86歳になって今分かることは、この世の中のことは、特にキリスト教のことでも、分からないことのほうが多いということです。全部自分でこれはこうだ、あれはこうだと解明できるなんて思ったら間違いです。例えば聖書のことでさえそうです。聖書に書かれていることが全部分かって、それを人に説明できるなどと思うのは、全くおこがましくて、そんなことは絶対あり得ません。むしろ聖書のことで分からないことのほうが多いのではないかと。これが、86歳になっての思いです。だから、世界のことでさえそうです。なぜこういうことが起こるのだろうということは、分からないことと言ったほうが正確でしょう。

発言者E ありがとうございます。

補足として1つだけ感想を述べたいのですが、私は中国人ですから、ここで台湾人に会ったことがありまして、いかに交際するか、ちょっと悩んでいます。中国の友人からも「台湾人だから話しかけないでください。危ないですから」という話もありまして、その話は、先ほどのおっしゃっている言葉を聞かせていただくと、ある特定の、つまり中国の立場で立ってそういう台湾人を考えることになりますね。そうではなくて、アジアの立場、確実に国家という単位を超えて、確実にアジアという地域に立ってこの話を発展するのがよろしいのではないかと、今回の感想です。ありがとうございます。

小菅(司会) ありがとうございます。

もうそろそろという時間ですので、私が最後にひとつ気になっていたことをお聞きます。ウクライナ戦争が、私たちは早く終わって欲しい、あるいは早く終わらせるべきだとは考えられませんが、今の先生の文脈で言えば、民族の独立・自由ということから、もしかしたらこれは時間がかかっても仕方がないことかもしれない。これからあと2年、3年、10年ウクライナ戦争が続いても、これは致し方ないことだと先生はお考えですか。

船戸 わたしはそう思います。それは大変な犠牲だと思うのですが、ベトナム戦争でベトナム人はなんと400万人が死んでいるのです。だからマクナマラ長官も「あれだけの犠牲が出ているのに、なぜ和平に応じなかったのか」と質問したのです。しかし、ボー・グエン・ザップ将軍が答えたのは、「自分たちは1,000年間中国に支配されていた。それを跳ね返して独立を確保した。これは絶対忘れられない」。これはボー・グエン・ザップ将軍でなくても、ベトナム人ならば、そういうでしょう。

だから、ベトナム民族というのは、すごい民族だと思っています。非常に優秀な人々です。アメリカへボートピープルで出て、今アメリカで生活しているベトナム人はアメリカの陸軍兵学校とか海軍の士官学校で、トップクラスに入ると言われています。非常に優秀な人たちです。プロポーズを断られた時には、とてもショックでした。日本人だったら恐らくそんなことは考えないでしょう。彼女は断る口実として、そのように言ったのかどうか、それは分かりませんが、とにかくそういうことが言えるという民族はすごいと思いました。

小菅（司会） 分かりました。ありがとうございました。

それでは本日はこれで閉じたいと思います。船戸先生、どうもありがとうございました。

船戸 どうもありがとうございました。

（拍手）

——了——

「激動の流れを生きて」 ―ウクライナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える―

慶應義塾大学教養研究講演会にて 船戸良隆

- (1) ベトナム戦争の要因 ドミノ理論（恐怖心）
- (2) ベトナムへ派遣
提灯デモへの反発 トマス・ア・ケンピス「キリストに倣いて」、
知行合一（陽明学）の影響 「戦争論」ではなく、「何もしなくてよいのか」という自身への
問いかけ
EACC（東南アジアキリスト教協議会）がサイゴンに「アジアキリスト教奉仕団」を結成、
日本の教会にワーカーの派遣要請あり。 応募者なし
恩師 隅谷三喜男先生（五味川順平「人間の条件」のモデル）に相談
日本基督教協議会が船戸牧師を派遣することを決定
教団議長 鈴木正久牧師のトラウマ 太平洋戦争における同僚の戦死
「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（1967.3.26）
朝鮮特需・ベトナム特需を契機とした日本経済の復興
「一粒の麦」新約聖書ヨハネ福音書 12：24 1967年10月 サイゴンへ
- (3) 具体的な活動内容
靴磨き少年と同居（サイゴンスラム街の倉庫を借りて自給生活）
米兵の靴を磨く 子供たちを地域の小学校へ徒弟となつての技術習得
- (4) テト攻勢（1968年1月30日）における民衆の反応
南ベトナム民族解放戦線による首都サイゴンの攻勢
3日～5日後における解放戦線兵士の摘発
- (5) ベトナムに医薬品を送る運動
北ベトナムへはハノイへ 南ベトナムへはサイゴンへ 解放戦線へは？
南ベトナム領内における敵と味方 双方への納税を余儀なくさせられる農民
競合地区のカイバイからプノンペンへ（密書を持って）
解放時における日本人の驚き 共同通信社の通訳が解放戦線の幹部、
日本大使現地雇用職員（現地情報提供者）の配偶者が解放戦線の幹部
日本人的「単眼的思惟構造」と「複眼的（トンボの目）思考」の必要性
- (6) ドン・ルースによる反戦運動
「トラの檻」（南ベトナム・コンソン島にあった政治犯収容所）を米国下院議員に紹介。
1970年7月17日の「LIFE」に写真掲載……日本においては岩波書店「世界」に掲載される。
アメリカにおける反戦運動の高まり 米軍の撤退と北ベトナム軍による開放（1975年4月
30日）
- (7) 民族の独立とは何か
サイゴンの反戦歌 チン・コム・ショーン ♪ 1000年間中国に、200年間フランスによる支配
ベトナムの愛国者女性は外国人と結婚しない
「自由と独立ほど貴重なものはない」 ボー・グエン・ザップ将軍